

古典の世界

6月

No.
3

万葉の世界

百人一首に詠まれた万葉集

田子の浦にうらいでて見れば白妙の富士の高嶺に雪はふりつつ

百人一首大会でこの歌札だけを取ろうと目を凝らしている生徒がいます。山部赤人の作と伝えられるこの歌は、有名すぎるくらい有名になっていますが、万葉集巻二に登場する赤人の歌とは若干異なります。

田子の浦ゆ打ち出てみればま白にそ不二の高嶺に雪は降りける

これが、赤人の原歌で前者は本歌取りと言われているものです。

万葉集の本歌は本歌取りをしたものと比べてみると最も万葉集らしさが出ていると感じられますが、それは、「田子の浦ゆ」「ま白にそ」に込められた情景と作者の感動が伝わってくるから

です。田子の浦とは現在の東田子の浦付近ではありません。由比・蒲原辺りを言ったのです。「ゆ」とは万葉時代に出てくる助詞で通過を表します。由比蒲原といえ、現在でもそうですが、切り立った山が海に迫り、波打ち際とのわずかな隙間を這うようにして道を通しています。もう少し詳しく言えば、清見寺のある清見

潟の隣、薩田峠あたりであろうと思います。その道を東に向かつて進みます。前号で言い及んだ「東下り」です。そして、ようやくにして、田子の浦を抜けた、その視線の先に頂付近に雪をかぶつて均整のとれた富士の威容が飛び込んだのです。それを「ま白にそ」と言いました。「そ」は文末表現と呼応して強調する助詞。「真つ白だな」位の意味でしょう。

「田子の浦に出てみれば」「雪はふりつつ」なんてありえないのです。だいたい由比・蒲原付近から富士は見えませんが、今雪が降っているなんて分かりません。挿入された「白妙の」と併せて語調を整え、歌としての調べを重視した改作なのです。それに比べ、万葉のそれは何と現実的で新鮮な感動が伝わってくるでしょうか。

春すぎて夏きたるらし白妙の衣ほすてふ天の香具山

新緑の緑と衣の白の色彩のきわだちが美しい持統天皇の作と伝えられるこの歌も田子の浦の歌と同様です。

春すぎて夏きたるらし白妙の衣ほしたり天の香具山

大きな違いは万葉集巻一では「衣ほしたり」となっている点です。衣を「干している」という意味で現実のありのままが伝わってきますが、古今集で改作された「ほすてふ」は「干した」というような意味で、伝聞です。遠く万葉時代をしのび、憧憬している歌となっているのです。

万葉集の巻十に、
秋田川る飯庵を作りわが居れば衣手寒く露ぞ置きにける

という読人知らず（よみびと）しらず：作者不明）の歌があります。「飯庵」とは「ほつたて小屋」のこと。だんだん冷え込んでくる秋、ほつたて小屋に住む農民の衣服は薄くて寒く、その上に屋根から夜露がしたり落ちてくる。当時の農民の厳しい生活の様が伝わってきます。

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ我が衣手は露にぬれつつ

これが後の世に伝えられていくうちに、農民の厳しい生活を思いやる天智天皇の御製とされるようになっていきました。自らを農夫に擬して、貧しさと孤独に耐える農民の生活を歌った歌になっていったのです。